

JE編集委員会企画



国際研究者識別子ORCID:

いま研究者が知らなければいけないこと

講師

宮入暢子

(Regional Director,
Asia Pacific,
ORCID, Inc.)

日時

2017年
1月25日(水)
16:30~18:00

場所

エリザベート
ベルクラシック
甲府



趣旨

2012年10月からサービスを開始したORCID(<http://orcid.org>)は、姓を変更したい所属機関を異動しても、生涯にわたって使える研究者のためのデジタル識別子で、すでに世界で270万人以上の研究者が利用しています。学術ジャーナルの投稿時や研究助成金申請の際にORCIDの提示を求められることも多くない、Science, PLOSなどの出版社は2016年より代表著者のORCID入力を義務化し、貴学会誌JEでも義務化が始まりました。本企画では、研究者にとってのORCIDのメリットを紹介し、さまざまな場面でどのようにORCIDが活用されているか、わかりやすく解説します。

※ 同日18:00 から、質問を受け付けます。是非ご参加ください。
(場所: けやき)

ORCID

Connecting Research
and Researchers

国際研究者識別子 ORCID : いま研究者が知らなければいけないこと

宮入暢子 (ORCID, Inc.)

ORCID (Open Researcher and Contributor ID) は、生涯にわたって使える研究者のためのデジタル識別子として、すでに世界で 270 万人以上の研究者によって利用されている。本企画では、ORCID 開発の背景や研究者にとっての ORCID のメリットを紹介し、さまざまな学術情報サービスでの ORCID の活用状況について概観する。

ORCID 開発の背景

従来の学術コミュニケーションにおける名前の曖昧さの問題 (name ambiguity) は、ジャーナルごとに異なる人名表記の慣例や、異動にともなって同じ研究者が複数の機関名にリンクされることに起因する。研究評価や大学の競争力分析などに使われる学術出版物や競争的資金獲得状況のデータの整備において、人物とその業績の正確な同定作業は多大な時間を要するものであった。特に大学・研究機関等におけるこれらの同定作業は、研究者自身による確認を要することもあり、研究者の事務負担増を招いた。こうした名寄せにかかる労力を緩和し、データの正確さと信頼性を担保できる共同レジストリが渴望され、学術出版社、助成金団体、学協会、研究機関などをメンバー機関とする ORCID の枠組みが提案されたのは、2009 年のことである。

ORCID のメリット

ORCID は、研究者自身が提供する情報をもとに、正確な人物同定と、所属先や履歴、学術業績との明確なリンクを担保するためのプラットフォームとして機能する。個人による利用は無料である一方、ORCID メンバーと呼ばれる各機関は運営組織である ORCID, Inc. に年会費を支払って利用する。研究者およびメンバー機関にとっての ORCID の主なメリットは、以下の 2 点である。

- (1) 研究者にとってそもそも自明である自身の姓名表記や所属機関、業績などの情報を自らレジストリに登録し、それらの情報を必要とする ORCID メンバー機関に対して電子認証プロセスを経て限定的なアクセス権限を与えることにより、本人が確認済みの情報を開示できる。
- (2) 論文の投稿時や助成金の申請時に ORCID をあらかじめ提示することにより、ORCID メンバー機関が運用するさまざまなサービスからの自動業績アップデートを可能とし、研究者の入力負担を軽減するとともに、メンバー機関を提供元としてデータの信頼性を高める。

ORCID の整備状況と展望

2016 年 11 月現在、39 カ国から 550 以上の機関が ORCID メンバーとして参加しているが、日本からのメンバー参加は 9 機関にとどまっている。ORCID を活用する情報サービスはすでに 250 以上を数え、特に国際学術誌では投稿および査読プロセスでの ORCID の活用が進んでいる。特に、英国王立協会が 2016 年よりすべてのジャーナルで投稿時に代表著者の ORCID 提示を義務化したのを皮切りに、PLOS、IEEE、Wiley、Science、米英の化学会などがこれに続いている。国内では、日本疫学会が 2016 年 8 月より *Journal of Epidemiology* での代表著者の ORCID を義務化した。

2012 年 10 月のレジストリサービス開始から 4 年を経て、2016 年だけでも 100 万人近い研究者が新規登録した ORCID は、着実に研究者情報のインフラとして学術コミュニティに定着しつつある。